

「ゴールド 金賞！」を



「一年生のみなさん、部活動を始めて一週間、色々楽器を試してみたいと思います。これから、楽器を決めるためのオーディションを行います。」
四月、部長の恵子は新入部員十人を前に、昨年度のコンクールのことを思い出していた。

呉中央中学校の吹奏楽部は、毎年三十人前後の部員で活動している。これまで、パートリーダーである三年生を中心に練習を重ね、みんなで曲を作り上げてきた。昨年度は、一年生を含めたメンバーで広島県吹奏楽コンクールに出場したが、銀賞に終わった。しかも、あと少しで金賞に手が届くところだった。結果を聞き、みんなは先輩達と悔し涙を流した。(これが最後のコンクール、今年こそ金賞を。)という思いを、三年生みんながもっていた。

恵子は顧問の山口先生といっしょに一年生一人一人の希望や演奏を聞き、担当楽器を決めていった。トランペットの希望が多かったが、恵子の説得で高橋君が何とかホルンに回ってくれた。

次の日から、音程や音色を合わせるために、パートごとの基礎練習が始まった。特に、朝練習で一年生の音出し練習に三年生が加わった。放課後もパートに分かれての練習に時間をかけた後、全体練習を行った。土曜日は弁当を持参し夕方まで練習を続けた。そんな中でも恵子は、部員一人一人に声をかけることを忘れなかった。

しかし、五月の連休を過ぎた頃から、朝練習や土曜練習を欠席する一年生が出始めた。理由を聞くと、寝坊したとか土曜日は他の用事があるからといった似たような返事が返ってきた。特に、気になったのは高橋君だ。放課後練習も欠席が目立つようになっていった。恵子は高橋君のことが気になり、練習前に一年生教室に行った。

「最近、練習に出てこないけれど、どうしたの。せつかく音が出るようになってるのに。」
「僕、やめようかと思ってるんです。自分がやりたかったのはトランペットだったし。毎日同じような練習ばかりで……。なかなか思うような音は出ないし。」

恵子は何も言えず、重い足取りで音楽室へ向かった。もうすぐ六月。コンクールは八月十日、その前に呉市中学校夏の演奏会にも出なくてはいけない。時間も限られていた。今さら楽器の変更はできない。音楽室では、すでに練習が始まっていた。

「部長が遅れてどうするの。」
と、山口先生に言われ、思わず涙ぐんでしまった。
「何かあったの。」

練習後、恵子は先生に声をかけられた。振り返ると数名の三年生も集まってきた。恵子は、高橋君や他の一年生のことをみんなに話した。

「やめたい人はやめてもらっていいんじゃない。」
「でも、これ以上人数が減っては、いい音を創れないわ。」
「それじゃあ、どうしたらいいの。」

「自分のパートの一年生を誘って行くようにしたらどうかしら。毎年、この時期にやめていく一年生がいるものね。みんな、協力して。無理強いはしないけど、後悔したくないわ。部員全員にも、明日もう一度三年生の思いを伝えるわ。」
と、恵子は言った。



翌日、恵子は部員全員に自分の思いを話した。

「今まで基礎練習を中心に練習してきました。これは、とても大切な練習です。一人一人の音がしっかりしていなければ、いくら全体で合わせても、いい音楽はできません。春からの練習で少しずついい音が出るようになっていたのに、最近の練習はどうでしょう。私達は去年と同じ思いをしたくないんです。」

「それじゃあ、かえって初心者の方がいいんじゃないですか。その方が金賞をとれると思いますよ。」

高橋君の言葉に恵子ははつとし言葉をつまらせたが、ゆっくりと顔を上げ話し始めた。「あなたは二年前の私なの……。私もなかなかいい音が出ず、迷ったり悩んだりしたわ。基礎練習も真面目に取り組む気になれなくて。でも演奏するのが好きだからやめなかつた。あなたも好きだから入ったのよね。だからこそ、みんなで創り上げる音楽の楽しさを味わってもらいたい。一人がいなくても私たちの曲にはならないわ。それぞれのパートが一つになり、みんなで呉中学校の吹奏楽部が奏でる『シーゲート序曲』を創っていきましょう。それが私達三十一人の目指す金賞なの。」
(えっ、部長も僕と同じ……。金賞は三十一人みんなで……。)

それから、一人また一人と、練習に顔を出さなくなっていた新入部員が練習にもどってきた。話を聞いてみると、他の部員も熱心に説得してくれたらしい。高橋君もあれから毎日練習に参加していた。しかし、練習を休みがちな一年生はまだいた。

そんなある日、恵子はいつもより早く朝練習に向かった。すると何人かの三年生も来ていた。

「おはよう恵子。一、二年生の指導に時間を取られて、自分の練習が思うようにできなくて。」

「実は私もなの。放課後も一、二年生が帰った後、練習できるように山口先生にお願いしてみるわ。曲も仕上げていかなくちやいけないしね。」

それから、一年生を誘う姿に加え、朝早く、あるいは日の暮れた音楽室から、音出しやパート練習をする三年生の演奏が聞こえてきた。

「吹奏楽部、よく練習しているなあ。コンクールがんばれよ。」

と、友達や先生から声をかけられるようになった。練習から遠ざかりがちだった一年生もだんだんと音楽室にもどり、三年生と一緒に自主練習する生徒も現れてきた。そして、その数は増えていき、いつのまにか全員が参加するようになった。

夏休みに入ると練習は朝から夕方まで続き、高橋君の呼びかけで日曜日の練習も加わった。呉市中学校夏の演奏会が終わると、ますます練習に熱が入った。

いよいよ明日は広島県吹奏楽コンクールだ。パート練習に励むみんなを見ながら、恵子は、これまでのことを思い出し胸が熱くなった。

「集まって。全体で合わせます。」

「ここからもう少しテンポを速めて音を段々強く。」

恵子の声とともに、今までとはひと味違った『シーゲート序曲』が校庭に響いていた。

